

# ご存知ですか？ 総監屋敷

明治末期の地図に現在の東急蒲田駅近くに「三島通庸」の大邸宅が載っている。土地の人々は総監屋敷と呼んでいたが、昭和初期の地図には消えている。

その頃の蒲田西口は、のどかな田園風景が広がって梨畑が住宅地に変わろうとしていた時期であった。総監屋敷は現在の御園中学校あたりであった。

さて三島通庸（みちつね）のことだが、彼は元薩摩藩士で明治十一年代に警視総監等を歴任して子爵に叙された人である。

三島が総監時代、東京市民を震駭させた事件が発生した。事件は強盗殺人で、犯人は清水定吉とい、変装巧みに捜査の目をかいくぐり強盗をくり返し、良民を恐怖の埒場に巻き込んだ。定吉の手口は、侵入し、家人を針金でしばり金を強奪、手向かえば殺すと言う凶悪犯で、のちに拳銃使用の殺人も犯す恐るべき大悪党であった。まず明治十三年秋、定吉は神田福田町、質商松岡半助方へ侵入、主人半助を殺し有り金を強奪したの

を手始めに、明治十八年の秋、黒船町の小西酒店に押し入り主人を射殺、家族、使用人の手首を針金で縛り有り金を奪い悠々と逃走した。

度重なる重大事件に東京市民は、「三島警視総監なにをしておる、五年間も凶悪犯を野放しにしておくと、実にけしからん話」と良民は不満をはいて三島をひどく誹謗した。

けれど三島は必死で捜査にあたっていたのである。あるときなどは変装して、下町の非常警戒を見廻るとき、新米巡査に誰何された。

「オレだ、三島じゃよ」

「なに、総監殿のお名を騙るとは、ふとどきなヤツじゃ」と横づらをイヤというほど殴られたこともあった。

警察署全体を督励してようやく犯人定吉を捕らえることが出来た。彼の履歴に残る「わが町西蒲田」（菅原翠石著「わが町西蒲田」から一部引用させていただきました）

（取材 都築委員）

## 編集委員の紹介

委員長 都築保二（安方南）  
副委員長 柏村茂（西蒲田一）

委員 柳通勝磨（蒲田西口）  
山崎修弘（東矢口一）

石渡咲子（西蒲田一）  
六車泰子（西蒲田二・三）  
瀬川二三（西蒲田二・三）  
塩田靖敏（西蒲田四）  
勝俣幸子（西蒲田女塚）  
伊藤多佳子（西蒲田六）  
西澤智恵子（西蒲田六）  
山田誠一（蒲田西口）  
飯嶋宏之（西蒲田七）  
下山恵美子（西蒲田七）  
竹内喜八郎（西蒲田八）  
多田鉄男（御園）

箕輪信一（新蒲田一）  
田中薫子（新蒲田一）  
鎌田耕一郎（道塚）  
幅邦子（道塚）  
星野定義（小林）  
高橋晴美（安方北）  
大平義明（安方南）  
滝口時春（多摩川二）  
（敬称略）



## わがまちの顔

### 丹尾シズエ園長（南蒲幼稚園）



園長在職七十年

丹尾（にお）シズエさんは大正二年、生粋の江戸っ子として東京深川に生まれ、今年で九十四歳。大正から昭和、平成と日本の激動を見つめてきた教育者の一人です。

幼いころより学校の先生になる夢を持ちつづけ、昭和五年東京市立第一高等女学校を卒業、同六年、教員養成所を経て、私立の幼稚園に教員として働きはじめました。やがて自身の心に芽生えた幼児教育の理想を实践したいという熱い思いに駆られて、昭和十二年十二月に南蒲幼稚園を設立しました。弱冠二十四歳でした。設立にあたっては不転の決意で臨み、両親を動かした。

親戚縁者に助けられ、また第一回卒園生のご父兄方に一方ならぬ応援や数々のご好意に甘えさせていただき実現することが出来ました。

当時の園は、道塚町（現新蒲田二丁目）にあり、蒲田の南に位置し、イメージとして南は明るく暖かく。その中で育つ児童たちは、健康で心円やかに成長するのであることを願って、南蒲（なんぼ）幼稚園と名付けました。園児数、僅か二十名でのスタートでした。年ごとに、園児数も増え園舎、設備も充実し楽しい保育の日々を送る中、突然戦争が始まりました。

昭和二十年四月十五日の大空襲にて園舎を含め町の一切が一夜にして跡形もなくなり、焼け野原に佇み、思いはただただ可愛い園児たちの安否でした。

戦後早速に卒園生のご父兄、地域の方々のご支援を頂き、昭和二十四年四月より、安方町（現多摩川一丁目）に再開園する運びとなり、第10回生として十二名で再出発しました。昭和二十七年に現在地に移転、園舎の改築や環

## 蒲田西特別出張所管内

人口	男	29,586人
	女	27,109人
	計	56,695人
世帯	30,108世帯	

平成19年11月1日現在

## 編集後記

\*かまにし17第25号で紹介した日体荏原高校柔道部の小林雅司選手は全国高校総体で優勝（81キロ級）しました。おめでとございます。

「お詫びと訂正」

\*かまにし17第25号4ページ2段目「六郷村天五木」は「六郷村天玉木」の間違いでした。お詫びして訂正いたします。

情報紙に対するご意見やご感想、また投稿などを事務局までお寄せください。

事務局 蒲田西特別出張所  
大田区西蒲田七十一番二七  
(三七三三) 四七八五

境を整え現在に至っております。当時の写真を見ますと正門の側に細く頼りげない桜の樹が写っています。五十余年を経過して今、まるで園の発展に歩調合せするように大樹に成長し毎年の卒園式、入園式を満開の花で包み、園を見守っています。

「ねがいあかるくのびのびと」

心ゆたかに たくましく

丹尾シズエ園長の幼児教育の理念を端的に表した色紙が園長室に飾ってあります。また児童と家族、とくに親子の絆にはこだわりがありました。その一つにはお弁当があります。最近給食に切り替える幼稚園が目だつてきました。お弁当を作る前にまず我が子の顔を思い浮かべ、喜ぶ姿を想像しながらの作業。子供はお弁当を開いた瞬間に母親なり、作ってくれた人の顔を思い出す。給食では絶対にこの絆は生まれません。

昭和51年文部大臣より幼児教育功労賞を受賞。平成4年勲五等瑞宝章受章。その他数々の受賞は、園長の七十年間にわたる、幼児教育にひたむきに拘わってきた教育者の姿勢をうかがい知ることが出来ます。

（取材 都築委員）

平成19年12月1日発行

# かまにし

第26号

発行 わがまち大田蒲田西地区推進委員会  
編集 地域情報紙編集委員会

# 特集 「消えていく民間信仰」

## 庚申信仰を中心に

「変貌した私たちの町」

私たちが住んでいるこの地域には、かつて特定の宗教とか宗派には直接関係なく古くから脈々と受け継がれてきた素朴な信仰がありました。民間信仰といわれるもので、地縁共同体としての地域社会の連帯を確認する儀式であると共に、情報交換の場でもありました。またこれといった娯楽や定まった休日がなく、毎日厳しい労働を強いられていた当時としては、数少ないレクリエーションの場にもなっていました。

大正12年(1923)九月一日に起こった関東大震災によって、大きな被害を受けた東京都心部の人口は、それ以降周辺地域に移動し、近郊地域であった大田区もそれまでの農村や漁村から急速に住宅地と化し、また工業地域へと変貌を遂げていきました。絶え間のない人口流入による共同体の変容と日常生活

の近代化、合理化の波によって、在来の古い習俗、生活習慣は残念ながら必然的に消え去ってしまおうという運命にありました。

### 「中国から伝わった庚申信仰」

そのように消え去った習俗のひとつに庚申信仰があります。庚申信仰というのは、もともと中国の道教の思想にもとづく「守庚申(しゅこうしん)」の習俗が古い時代に日本に入ってきたもので、平安時代には宮廷の行事として行われていました。それが江戸時代には庶民の信仰となり、全国的に広がっていったものです。

中国で四世紀に成立した「抱朴子」という書物には次のように書いてあるそうです。「人間の体内には生まれたときから三尸(さんし)と呼ばれる虫(欲望さ、愚かさ、怒り)が住んでいる。この虫はその人の死後自由になれるというので、いつもその死を望んでおり、庚申(かえさる)の日、人が眠っている

る間に体内を抜け出して天に昇り、その人の罪過を天帝に報告する。天帝はその報告に基づき、その罪の軽重によって人の命を縮めていく。」

そのため、この日は寝ないで三尸の昇天を防ぐと長寿を保つことが出来ると考えられるようになりまし。この「守庚申」の習俗が信仰にことよせて一晩寝ないで飲食し、談笑する庶民の娯楽に変化していき、「庚申待」(庚申待ち)の習俗として江戸時代に盛んになっていったようです。

大田区内でもかつては各村々に庚申信仰の寄り合いである庚申講がありました。この講に加わっている人たちは、庚申の日に講員の家(宿)にあつまり、床の間に青面金剛(しょうめんこんごう)などの神仏の掛け軸をかけてこれを拝み、一緒に飲食をして世間話に花を咲かせました。宿は講員の家が交代で順番に受け持ちました。

講によって多少そのやり方は違いますが、基本的には宿では里芋、人参、牛蒡、油揚げ、がんとどきなど五種類の材料を醬油で煮付けたものや魚が出されました。お酒も振舞われたよう

です。参会者が宿に集まる時間はまちまちで、家で夕食を済ませてから集まる場所もあれば、夕食をとらずに集まる場所もあったようです。元は寝ずに一夜を明かし、翌朝散会しましたが、後には十二時前には散会となりました。

出席者は一家の主人かあるいはその代理の男子に限られていましたが、後には女性も出席したようです。庚申の日は年に六回(六十日に一度)まわってきますが、毎回行うところは少なく、年に四回か二回が普通だったようです。一月中に庚申の日が廻ってきたときは、「寒申(かんさる)」は火に祟る」といってやらなかったようです。

講員たちはお金を積み立て、集めた浄財で庚申供養塔を建てました。区内には全部で九十八基の庚申塔が現存しています。区内各所に広く分布しています。が、どちらかといえば大森や糀谷、羽田などの低地部には少なく、台地の農村部であった馬込、雪谷、久が原、嶺町、鶉の木などに多いという傾向があるようです。

### 「蒲田西地区の庚申塔」

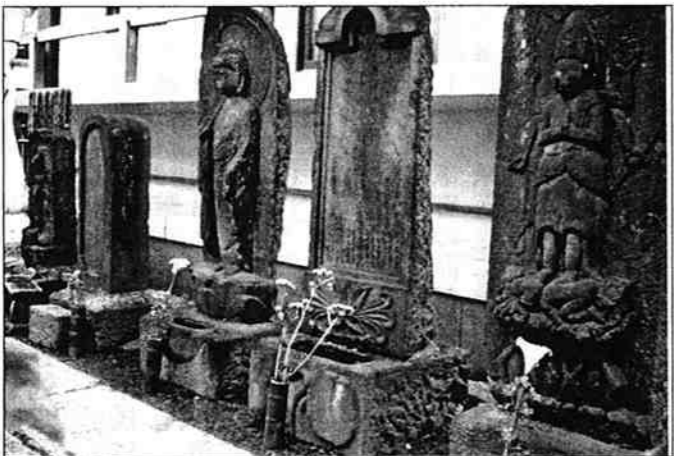
私たちが住んでいる蒲田西地区には、安方の遍照院、道塚の大楽寺、小林の金剛院、蓮沼の蓮花寺などに全部で十基ほどの庚申塔が残っています。

庚申塔というとすぐ六本の腕を持ち、怒った顔の仏像を彫った青面金剛を思い浮かべますが、江戸時代初期には青面金剛像はなく、地藏菩薩像や阿彌陀如来像、観世音菩薩像などの庚申塔が建てられたようです。区内で最も古い庚申塔は沼部の庚申様として有名な密蔵院にあります。が、地藏菩薩像で寛文元年(1661)に建てられました。蒲田西地区で一番古い庚申塔は阿彌陀如来像で金剛院境内にあり寛文十二年(1672)に建てられています。

それ以後は青面金剛像が主流になってきますが、これには必ずといってよいくらい三匹の猿(見猿、聞か猿、言わ猿)が彫られています。庚申信仰と猿の関係は詳述した記録はないようですが、庚申(かのえさる)の「申」が「猿」に通じるところからではないかと考えられています。

また、庚申塔には雄と雌の二羽の鶏の像を刻んだものも多くあります。三尸が人の体内を抜け出して天帝のもとに報告に行くのは早晩の鶏の鳴く時までといわれています。そこから鶏の鳴く時まで守庚申を続けることによつて罪障が消滅するという思想が生まれ、鶏が彫られるようになったようです。

### 「遍照院の庚申塔」



蒲田西地区で注目されるのは遍照院で、ここには本堂に向かっ

て左側に五基の石塔が並んで建てられています。そのうちの三基が庚申塔で残りは念仏供養塔と廻国供養塔なのですが、庚申塔のうち二基には安方村と小林村の両方の村民の名前が刻まれています。二つの村は寛永年間(1624~44)に東海寺(品川区)の寺領になっており、昭和になってからの地図を見ても飛び地だらけで領域が互いに交錯していることがわかります。おそらく同じ東海寺領になったために、互いの領域が未分離のままになり、それが昭和初期まで続いたのではないかと考えられています。供養塔に両方の村人の名前が刻まれているのもそのためでしょう。

### 「散歩のおついでに」

このように地域に残る庚申塔からでも、私たちが住む町の歴史の一端をうかがい知ることが出来ます。散歩のついでにでも調べてみるのも、又楽しいことでしょう。

参考までに、蒲田西地区にある庚申塔の所在寺を記しておきます。

遍照院・多摩川一丁目5番14号  
大楽寺・新蒲田三丁目4番12号

金剛院・新蒲田二丁目3番6号  
蓮花寺・西蒲田六丁目13番14号  
金剛院には天和二年(一六八二)と寛文十二年(一六七二)に建立された二基の庚申塔があります。が、いずれも空襲のためかなり欠損しています。

### 「金剛院の庚申塔」



(取材 柏村・多田委員)